

# 多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員  
横山 達也

## ウナギ (ニホンウナギ)

*Anguilla japonica*

蒲焼や鰻丼などに利用され、私たちにとってなじみのニホンウナギは、ウナギ科ウナギ属に分類され、日本を含む朝鮮半島からベトナムまでの東アジアに広く分布しています。成魚の全長は最大で1.3 mほどになり、体表は粘膜に覆われているため、ぬるぬるしていますが、実は皮下に小さな鱗をもっています。意外と知られていないことは、ウナギの血液の中のタンパ



パイプ等を仕掛けておくとウナギが捕れるかも!!  
細長い体がすっぽり入る筒状が安心するようだ!



ク質に人間にとって毒になる成分があり、注意が必要です。川の中流から下流、河口、湖などに広く生息し、夜行性で、日中は砂の中や岩の間に潜んでいます。鰓の他に皮膚でも呼吸ができるため、体と周囲が濡れてさえいれば、陸上でも生きることができます。産卵は、マリアナ海嶺のスルガ海山付近であることが確認され、6〜7月の新月の日に一斉に産卵するといわれています。卵から孵化した仔魚は、レプトケファルス(葉形幼生)と呼ばれ、柳の葉のような形をしています。この葉のような体型は、まだ遊泳力が未熟な仔魚が、海流に乗って日本近海までの長距離を移動するための適応と考えられています。レプトケファルスは変態を行い、円筒形の体へと形を変えると、「シラスウナギ」と呼ばれます。シラスウナギは川を上り、5年から10数年ほどかけて成熟します。最近、天然水域の生息数が激減しており、絶滅が心配される魚の一種になりました。

under the water

the waterside

# 花想鳥感

## 四季折々、 水辺の生物多様性

芥川緑地資料館 主任学芸員  
高田 みちよ

## ノウルシ



鵜殿は淀川流域でも最大のヨシの群生地であり、野鳥や動植物の貴重な生息地ともなっています。昔から多くの歌人に詠まれていて、紀貫之の『土佐日記』にも記述があり、谷崎潤一郎の『蘆刈』の舞台が鵜殿のヨシ原とも言われています。鵜殿のヨシは太く弾力性があり、雅楽の箏(ひちりぎ)の蘆古(リード)として使用されています。大阪みどりの百選、関西自然に親しむ風景100選にも選定されていますが、数年後には第2名神が上空を通過する予定です。毎年2月末には「ヨシ焼き」が行われ、前年のヨシの枯れた茎は一掃されます。ヨシ焼きの後、早春に生えてくる植物の代表がノウルシ。特に美しい花というわけでもありませんが、焼け野原のヨシ原に50cmぐらいの新緑と黄色い花がよく目立ちます。この花は



ヨシ焼きの後に  
きれいな花が広がる

「杯状花序(はいじょうかじょ)」という、ちょっとかわった形をしています。雌花は雌しべ1個、雄花は雄しべ1個だけで形成され、雌花1個と複数の雄しべが苞葉でできた杯の中につき、杯の出口に黄色の腺体(せんたい)が花弁のように取り巻いています。雄しべより先に雌しべが成熟し、ニョキッと立ち上がって他の花の雄しべの花粉で受粉すると、腺体の隙間に横倒しに倒れます。続いて雄しべが成熟し、ニョキッと立ち上がって虫に他の花へ花粉を運んでもらいます。雄しべがしおれると、果実を成熟させた雌しべが再び立ち上がり、高い位置から種を撒きます。春の一時期だけに咲き誇り子孫を残すノウルシを、ぜひ鵜殿に見に来てください。

the sky & land

## 水辺の

# 虫眼鏡

## 川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

## 水生昆虫も卒業シーズン

2月中旬頃から淀川の水位は、上流域(水源の琵琶湖が高水位)の雪解け水により高い状態が続いています。早春季はこれまでにご紹介してきましたカゲロウやカワゲラ、トビケラの仲間など、多くの水生昆虫は水中生活の卒業準備の季節でもあり、大きく生育した水生昆虫の観察に適した季節ともいえます。水生昆虫の多くは、流れの速い瀬(早瀬)に多く生息しています。このような場所は宇治川や桂川、木津川ではよくみられますが、淀川では水深が深く流れの緩やかなところが多く、特に淀川大堰近くの城北ワンドの周辺では流れ



2月下旬の鵜殿の早瀬



ヒラタカゲロウ科



カワゲラ科



シマトビケラ科

はほとんどありません。しかしそんな中、淀川でも小規模ではありますが、左岸では楠葉〜牧野周辺、右岸では山崎(鵜殿)〜前島周辺で早瀬がみられます。この早瀬でタモ網を用いたり、石を丁寧に持ち上げて水生昆虫を採集して観察してみてください。カゲロウ、カワゲラ、トビケラ類を多く見ることができます。また、きれいな水の指標種で主に河川の上流域に棲息するようなヒラタカゲロウ、カワゲラ、ブユなどもこの場所で見ることができます。市街地を流れるこの淀川で、これだけ多くの水生昆虫を見ることができるのは、水生昆虫の羽化前のまさに早春季、そして、この場所だけでも知れません!

the worst 100

## 侵略的外来生物

# 淀川ワースト100

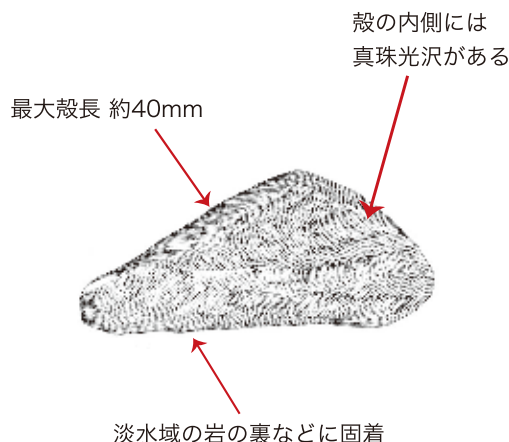
## イガイ科 カワヒバリガイ

*Limnoperna fortunei*

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



宇治川で確認された  
カワヒバリガイ。  
岩にしっかりと固着している。



AN INVADER

東アジアから東南アジアに分布する淡水棲二枚貝。ムール貝の仲間で、足糸でコンクリートや岩などに付着する。1990年、日本の自然水域で初めて確認。場所は岐阜県の揖斐川下流で、その後は琵琶湖・淀川水系でも生息が確認されている。侵入経路は、中国産のタイワンシジミに混入していたと思われる。成体の船舶付着、バラスト水に含まれた幼生などの侵入の可能性も。農業水路の壁面や貯水池に固着したり、死貝が詰まることによって通水障害を起こす被害が各地で起こっている。除去が困難なこと、大量死して水質の悪化を招くことなどが問題視されている。数が少ないうちは見つからないことが多く、大量発生まで放置されがちになるらしい。